

レオナルド・シャーシャとジャーナリズム

吉村法子

序文 本稿の射程

「…社会の中での、その役割を考えると、作家は反対意見を表明するもの、つまりいかなる種類のものであれ、権力に対して異議申し立てを行う存在だ。社会の中では常に反対意見の表明が必要とされる。この役割を担うものは何よりも作家だ¹⁾」

レオナルド・シャーシャ

イタリア人作家レオナルド・シャーシャ Leonardo Sciascia (1921-1989年) は、「社会派」の作家と目される。シチリアに蔓延るマフィアを扱った『真昼のふくろう *Il giorno della civetta*』(1961年)、『人それぞれに *A ciascuno il suo*』(1966年)、『ちいさなマフィアの話 *Una storia semplice*²⁾』(1989年)、権力の腐敗を扱った『権力の朝 *Il contesto*』(1971年)、『トード・モード *Todo modo*』(1974年)、キリスト教民主党の党首アルド・モーロの誘拐・殺害事件を扱った『モーロ事件 *L'affaire Moro*』(1978年)など、作品はルポルタージュ的作風で、ジャーナリスティックな側面を持ち合わせている。「社会における作家の役割は、権力に対して異議申し立てを行っていくこと」だという信念を持つシャーシャが、「第4の権力」であるジャーナリズムと関わり続けたのは自然なことだったのかもしれない。作品発表の場として作家と新聞・雑誌は切り離せない相関関係にあり、シャーシャもまた「三面 *Terza pagina*」をと呼ばれる新聞文化欄やコラム欄などで多くの評論やエッセイなどを発表した。

本稿ではシャーシャと結びつきの強かった新聞を中心に、①地方紙、②政党紙、③全国紙のカテゴリーに分けて、『真昼のふくろう』での成功を経て、地方から全国へと活動の場を広げていった軌跡を見ていく。中でもシチリアの新聞『オーラ *L'Ora*』(1900年4月22日創刊～1992年5月9日廃刊)や、共産党日刊紙『ウニタ *L'Unità*』(1924年2月12日創刊～現在に至る)、共産党機関誌『リナッシタ *Rinascita*』(1944年6月創刊～1989年8月廃刊)との関わりは深い。これらを見ていくと「社会的責務 *impegno*」がひとつのキーワードになっており、ファシズム体制下の非合法時代から続くイタリア共産主義者との関係が、その文学に大きな影響を及ぼしている。シチリアの辿った歴史がシャーシャのエッセイや物語との重層的に重なり合い、時代を浮かび上がらせる。さらにシャーシャは作中にも新聞を幾度となく登場させ、作品を語る重要な手段として機能させる。

先行研究については年代順に以下のとおりである。ジュゼッペ・トライナ Giuseppe Traina の「新聞と雑誌 *Giornali e rivista*³⁾」(1999年)。共著『シャーシャー新聞小説 *Sciascia, il romanzo quotidiano*⁴⁾』(2006年)。同じくトライナの「シャーシャの小説における新聞とジャーナリスト *Giornali e giornalisti nella narrativa di Sciascia*⁵⁾」(2009年)。タニア・ジュディチェッティ・ロヴァルディ Tania Giudicetti Lovaldi の「混乱からの明晰な声ーティチーノの新聞への寄稿 *Una voce chiara dalla confusione. La collaborazione ai giornali ticinesi*⁶⁾」(2011年)。イヴァン・プーポ Ivan Pupo 『大量の切り抜きー珍しくて収録されなかったシャーシャ *In un mare di ritagli: su*

『*Sciascia raro e disperse*⁷⁾』(2011年)。

さらに新聞・雑誌掲載記事を追うにあたり、以下のシャーシャ文献目録を使用した。ヴァレンティーナ・ファッシャ Valentina Fascia 編纂 フランチェスコ・イツォ Francesco Izzo / アンドレア・マオリ Andrea Maori 共著の文献目録(1998年)、アントニオ・モッタ Antonio Motta の文献目録(2009年)、プーポが著書の巻末に付けた文献目録⁸⁾(2011年)である。特にモッタの文献目録は時系列に沿って全体と個別のケースの両面から追う手助けとなった。またイタリア・ジャーナリズム全般に関しては、モンダドーリ出版のイタリア・ジャーナリズム *Giornalismo italiano* シリーズ、ラテルツァ出版のイタリア新聞 *La stampa italiana* 叢書、各新聞・雑誌のデジタル・アーカイブも利用した。

シャーシャと共産党との関わりについては、エマヌエーレ・マカルーソ Emanuele Macaluso の『レオナルド・シャーシャと共産主義者たち *Leonardo Sciascia e comunisti*』(2010年)が挙げられる。その他に作品集としてボンピアーニ版3巻(1987年、1989年、1991年)とアデルフィ版2巻(2012年、2014年)を挙げる。アデルフィ出版には執筆過程や、掲載媒体などの書誌情報が詳しく記載され、変更部分を追ったヴァリエーション研究も収録されている。また地方から全国へと活動の場を広げていった編集者シャーシャと出版社との関係を書いた越前貴美子の「シチリアの片隅から世界へ—編集者レオナルド・シャーシャ」(2012年)を挙げる。

これらの研究を踏まえ、本稿ではシャーシャとジャーナリズムとの関わり、さらにはシャーシャのジャーナリズム観を見ていく。

1. 地方紙での仕事

1.1. シチリアの新聞『オーラ *L'Ora*』での執筆

シャーシャとシチリアの新聞『オーラ *L'Ora*』との付き合いは、まだ無名であった1955年に始まり1989年に作家がなくなるまでの34年間に渡り、他の研究者たちもその関係性の強さを指摘するところである(AA.VV. 2006: 15, 67)。1964年～1968年には「雑記帳 *Quaderno*」と名付けられたコラム欄を担当し、没後同名の書籍となって1991年に出版された。『オーラ』についてシャーシャは次のように言及している。

『オーラ』はもちろん共産主義の新聞かもしれない。しかし他のイタリアの新聞ではできないほど自由に、私の考えを表現させてくれる。私が左派であることに関しては、間違いなくそうであり曖昧さはない。

…*L'Ora* sarà magari un giornale comunista: ma è certo che mi dà modo di esprimere quello che penso con una libertà che difficilmente troverei in altri giornali italiani. In quanto al mio essere di sinistra, indubbiamente lo sono: e senza sfumature.

『オーラ』1965年4月3日

シャーシャは1961年の『真昼のふくろう』で作家としての地位を築いたが、後の全国紙『コッリエーレ・デッラ・セーラ *Corriere della sera*』や『ラ・スタンプ *La Stampa*』での執筆活動以前は、

『オーラ』での仕事が目立つ。1963年頃までの『オーラ』での執筆については、イヴァン・プーボ Ivan Pupo の研究 (2011年) によって知ることができる。『オーラ』での執筆内容をまとめると、①シチリアの詩人や作家についての評論、②のちの中編小説に続く、短編や評論を発表、③文学評論 (イタリア国内外)、④社会情勢や犯罪、マフィア、その他、戦争やファシズムについての言及であった。

更に内容を詳しく見ていくと、①のシチリアの詩人や作家については、ピランデッロ、ブランカーティ、ヴェルガ、ヴァンナントなどを取り上げている。②については小説『真昼のふくろう』や『人それぞれに』につながる作品や評論が発表された。③の文芸評論については、例えば、ジェームズ・ジョイス James Joyce の『ユリシーズ *Ulysses*』(1922年/イタリア語訳初出は1960年) などについて書いている。④の社会情勢、犯罪については、W. R. バーネット William Riley Burnett の『アスファルト・ジャングル *The asphalt jungle*』(1949年/イタリア語訳初出は1951年) を用いて、アメリカのリトル・イタリーの犯罪について言及し、リトル・イタリー小説にはジョヴァンニ・ヴェルガ Giovanni Verga の流れが入っていると。またモーロ事件⁹⁾についても書いている。

小説『真昼のふくろう』への最初の試みもまた『オーラ』で行われた。1958年12月1日～12月2日に掲載された短編小説「沈黙 *Il silenzio*」である。数か月後『文学の苑 *Fiera letteraria*』(1959年2月8日号) に部分変更されて同名のタイトルで掲載された (OAI: 1763)。

「沈黙」の執筆に関してはパオロ・スクイツラチョーティ Paolo Squillacioti の研究「真昼のふくろうの夜明け：シャーシャの「沈黙」 *L'alba del giorno della civetta: Il silenzio di Sciascia*」(2008年) で知ることができ、シャーシャがカルヴィーノに宛てた手紙でその過程を取り上げている。1958年10月2日の手紙では「推理小説手法のマフィアに関する長めの短編を書いている。題名はシェークスピア風に (真昼に現れるふくろうのように) 『ふくろうの昼』だ¹⁰⁾」。さらに遡ると1957年9月2日の手紙では「“推理小説”の手法を使った短編に着手し始めた。シチリア的環境で、マフィアと政治の話だ¹¹⁾」と言及している。また「沈黙」に先立ち、1956年にレナート・カンディダの『このマフィア』が出版されておりシャーシャ作品についての言及があることから、カンディダとシャーシャが意見を交換し合っていた可能性を竹山は訳書(1987: 173)のなかで記している。このように1961年『真昼のふくろう』への準備が着々となされていたことが分かる。

さらに取り上げておきたいのが、『オーラ』1965年2月6日に掲載された「言語の問題 *La questione della lingua*」および「モーロの言葉 *La lingua di Moro*」である。ピエル・パオロ・パゾリーニ Pier Paolo Pasolini が提唱した「新しい言語問題」についての言及と、その中で引き合いに出されたアルド・モーロ Aldo Moro の言葉について、モーロが南部イタリア出身の政治家 *un uomo politico meridionale* であることを強調しながら南部イタリア人としての見解を加えている。モーロの言葉については1978年『モーロ事件』の折に、パゾリーニの言葉を引き合いにして再び触れることになる¹²⁾。(Qua: 35-37)

1.2. 作品に描かれるシチリアの新聞

シャーシャは新聞への寄稿者であると同時に、作品にも重要な手がかりとして新聞を滑り込ませている。『真昼のふくろう』では、論調の異なる2つのシチリア新聞を描いている。ジュゼッペ・トライナ Giuseppe Traina はこれを、パレルモ発行の新聞『シチリア日報 *Giornale di Sicilia*』と『オーラ *L'Ora*』であると指摘している (Traina 2009: 70-71)。シャーシャ自身もまた2つの新聞の執筆者でもあった。

『シチリア日報』は1860年6月7日にパレルモで創刊された日刊紙で、地方紙 *regionale* にあたる。所有者は現在に至るまでアルディッツィオーネ家である。(SIN: 534)

『オーラ』は1900年4月22日にパレルモで創刊された日刊紙である。初代社主はシチリアの新興ブルジョアジー・フローリオ家¹³⁾であったが、幾多の困難に見舞われ様々な社主の手に渡ってきた(GII:1777; GI3: 1886-1887)。1954年にはイタリア共産党 (PCI) 系出版社が引き継ぎ、編集長ヴィットーリオ・ニスティコ Vittorio Nisticò の時代を迎える。在任期間は1954-1975年であった(GI3: 1886-1887)。就任してすぐに、無名時代のシャーシャに執筆を要請している。シャーシャの記事が初めて『オーラ』に掲載されたのは1955年2月25日で、編集長就任からわずか3ヶ月ほどのことであった。左派がスポンサーとなったことは、新聞の方針にも大きく影響している。ニスティコは果敢な調査をするジャーナリズムの手本のような人物であり、ジャーナリストの養成にも長け、全国紙で活躍する人材を輩出している。さらにはグラフィックや割付を一新、写真による報道記事を発展させて新聞の知名度も上げた。また『オーラ』はマフィアを扱った最初の新聞であるといわれる¹⁴⁾。『オーラ』での仕事は、ニスティコに感化されるところが大きかったと思われる。

トライナはこの2つの新聞が『真昼のふくろう』で果たす役割を指摘している。「ジャーナリストと新聞は読者に対して、暴くことと隠すことの相反する事実を伝えるのが常だ¹⁵⁾」(Traina 2009: 69)とし、作中に新聞の名前はないが、事実を暴く新聞に『オーラ』、シチリア的常識をもって真実を覆い隠す『シチリア日報』という構図を挙げている (Traina 2009: 70-71)。『シチリア日報』は一般の地方紙で、『オーラ』よりも購読者も多い。『オーラ』はラディカルな新聞と位置づけられるのかもしれない。北部イタリアからやってきたベッローディ大尉が調査する事件の本筋を正確に伝え、マフィアと政治家の癒着という核心に触れる。一方『シチリア日報』は、愛情のもつれという事件の本筋からずれたところに“意図的に”焦点をあてていることを匂わせる。

結局事件はシチリア的良識によって、事実がうやむやにされていく。この2つの新聞で見られるように、何を選別するかによって見えるものが変わってくる。各新聞社の方針の違いを浮き立たせることによって、新聞が“選別された事実”であり、見えているものが必ずしも本質ではないというシャーシャの辛辣なメッセージがある。

2. 政党紙での仕事

2.1. 共産党との関わりと、作品に描かれる共産党紙

若き頃からシャーシャにとって共産党はいつも近くにある存在だった。シャーシャと共産党の関係は、共産党が非合法であったファシズム期に遡る。カルタニセッタ時代¹⁶⁾からのつながりのある共産党政治家エマヌエーレ・マカルーソ Emanuele Macaluso¹⁷⁾の著書『シャーシャと共産主義者たち *Leonardo Sciascia e comunisti*』(2010年)や、作品集の年代記(ボンピアーニ版とアデルフィ版)を中心に見ていく。マカルーソによると、2人が出会ったのは1940年代に入るところでシャーシャが20歳の頃である。弟同士が同じクラスで、シャーシャの弟ジュゼッペがマカルーソ宅に来ていたことに縁があった。当時カルタニセッタの街は、「シチリアのアテネ」とシャーシャが呼ぶほど知識人が集まり、また反ファシストの中心地でもあった (Macaluso 2010: 12-18)。マカルーソは当時の様子を次のように語る。

あの時代、イタリア各地の若い知識人たちは反ファシストの意識を熟させ、自由のために戦うことを決めていた。多くの者たちが共産党とともにあり、非合法支部で既に積極的に活動していた。マルクスやレーニンを読んだからではなく、イタリア共産党が、自由や正義、社会変化、より良い世界のための戦いを知っているからである。シャーシャは私同様に非合法下で、ロドルフォ・モンドルフォの『マルクスの足跡について』やカルロ・カフィエロの『資本論概要』を読んでいただろう。

A quel tempo tanti giovani intellettuali, in ogni parte d'Italia, maturarono una coscienza antifascista e decisero di battersi per la libertà. Molti con il Pci, il quale con le sue cellule clandestine era già sulla breccia. Con il Pci non perché avessero letto Marx o Lenin, ma perché quel partito sapeva intrecciare la lotta per la libertà a quella per la giustizia, per un cambiamento sociale e per un mondo migliore. Sciascia leggerà, come me, nella clandestinità *Sulle orme di Marx* di Rodolfo Mondolfo e il *Compendio del Capitale* di Carlo Cafiero. (Macaluso 2010: 16-17)

ファシズムからの解放前後に、共産党がイタリアにおいて果たしていた役割と熱気がマカールソの著書から想像される。元イタリア大統領ジョルジョ・ナポリターノ Giorgio Napolitano も、南部イタリアにおけるこの時代の共産党について同様のことを述べている¹⁸⁾。1941年マカールソとシャーシャは非合法共産党支部の反ファシズムグループで一緒だった。ただしシャーシャは入党はしていない (Macaluso 2010: 裏表紙より)。カルタニセッタが持っていた空気や、この街に知識人たちが集まっていたことが、シャーシャの文学的思考形成に大きな影響を与えている。この南部イタリアにおける共産主義者を描いた作品を「スターリンの死」や「撤去」でも見ることができる。

「スターリンの死 *La morte di Stalin*¹⁹⁾」(1957年)は、かつて熱心な反ファシストでいまは共産主義者のカロージェロ・スキロの話である。彼はスターリンを夢に見るほど崇拜するが、そんな彼に司祭長はスターリンを独裁者であるとの見解を示している。スターリンが亡くなるとカロージェロはひどく不安になり、同時に後継者をめぐる動きに何かうまく説明できないもの、ロシアに起こっている出来事を感じ取っていく。ある日カロージェロは司祭長から新聞を渡される。「スターリンに関するフルシチョフ報告が全て書いてある」と司祭長は皮肉をこめて言う。カロージェロが「妄想で、どうせ教区の新聞だろう」と言うと、「違う。これは『エスプレッソ *L'Espresso*』だ」と言われ、必ず読むように念を押される。『エスプレッソ』のフルシチョフ報告を読み、捏造だと信じ、共産党日刊紙『ウニタ *L'Unità*』を読むが、否定する記事を見つからない。そこで『シチリア日報 *Giornale di Sicilia*』を買いに行く。『シチリア日報』では“スターリンが妻を殺害していた”という記事を見つける。顔見知りの共産党議員に聞きに行くと、「おそらくでっちあげだと思うが」と前置きしたうえで、「個人的には真実だと思う。彼はヒトラーのように独裁者だった」と告げられる。カロージェロは「スターリンは死んだ。だが共産主義は生きている *Stalin è morto, ma il comunismo è vivo*」(OAI: 121)と自身を納得させる。

「撤去 *La rimozione*²⁰⁾」(1962年)「スターリンの死」を簡略にした共産主義の男ミケーレの話だ。妻フィロメーナは、同名の街の聖人フィロメーナの像撤去到反対する女性たちのストライキに参加し教会に立てこもる。主人公ミケーレは批判的な眼差しで連れ戻しに行くが、自身はスターリン像撤去のニュースを『ウニタ』で読んで動揺する。2つの短編小説は、スターリン神話が崩壊していく

様子を、スターリン崇拝者たちの目線を通して描いている。『エスプレッソ』や『シチリア日報』は、司祭長とカロージェロのあいだに客観性をもたらす手段として置かれている。

「スターリンの死」に関して、いつも出版前の作品を読んでもらっていたイタロ・カルヴィーノ Italo Calvino からの反応がある。

君のスターリンを読んだよ。君に何を言うべきだろう？客観的な評価をするのは難しく、‘自由に’読めるには、あまりに自分の肌の中であって、あまりにドン・カロージェロが自らの中にある。(1956年9月12日)

ho letto il tuo *Stalin*. Cosa ti devo dire? M'è difficile darti un giudizio spassionato. C'è troppo anche della mia pelle là in mezzo, c'è troppo Don Calì anche in me, per poter fare una lettura «libera». (OAI: 1721)

これに対してシャーシャは「カロージェロ・スキロの話はどこか自分の話でもある。ゆえにカリカチュアとしてのみ受け止められたとしたら残念だ。La storia di Calogero Schirò è un po' la mia storia. Mi spiacerrebbe perciò se venisse intesa solo nel senso della caricature」(1956年9月16日)と返信している。シャーシャはこのカルヴィーノへの手紙の中で、フルシチョフ報告に腹を立てたこと、そして自分のこととして受け入れられないこと、スターリンが世界で重要な人物であるといまだ確信していること、しかし権力の座に長く居るにつれて悪くなっていたこと、そして自身が非常に混乱していることを伝えている。(OAI: 1722)

マカルーソもこのカルヴィーノの手紙を取り上げ、自らは「スターリンの死」が気に入ったとしたうえで、カルヴィーノの痛みを次のように理解する。

美しく、そして苦い手紙だ。1956年多くの活動家が負った苦痛を示している。イタロ [カルヴィーノ—引用者]のようにイタリア共産党を去った者や、党にとどまりながらもイタリアやソ連で物事が変わるのだろうと考えていた者たちのことだ。シャーシャは活動家ではなく異端であったが、少なくとも1978年までは、うまくいっていないことが変わるだろうと信じていた一党内においても、そしてソ連においても—。

Una lettera bella e amara, che rivela quale fosse il travaglio di tanti militanti in quel 1956: in chi lasciò il Pci, come Italo, e anche in chi rimase pensando che le cose potessero mutare in Italia e in Urss. Sciascia non era un militante, era un eretico, ma almeno sino 1978 riterrà che la sua e altre eresie potessero cambiare – nel partito e anche in Urss – quel che non gli andava bene. (Macaluso 2010: 24)

「スターリンの死」や「撤去」は、かつて反ファシストであった共産主義者の人生を描き出す。まず初めにファシズム打倒とイタリア解放過程のなかで、社会的責務を感じた経験があり、その後のスターリンの死とフルシチョフのスターリン批判によって味わった共産主義者の苦い体験だ。強制されたわけでもなく、自らの意志によって選択したからこそ、どこに向けてよいのか分からない苛立ちと混乱が沸き起こる。カロージェロが最後に呟く「スターリンは死んだ。だが共産党はまだ生きている」という言葉は、その後のシャーシャと共産党と関係ともつながる。

2.2. 共産党機関紙『ウニタ *L'Unità*』『リナッシタ *Rinascita*』と社会的責務の意識

シャーシャは多くの媒体に寄稿しているが、特に共産党紙の寄稿は特別なものであったと考えられる。また寄稿時期は1960年代に集中している。

共産党日刊紙『ウニタ *L'Unità*』は1924年2月12日ミラノで誕生した共産党日刊紙で、新聞名はアントニオ・グラムシによって提案され、コミンテルン執行部の発案で創刊された²¹⁾。『ウニタ』は1962年に統一されるまで、ローマ版とミラノ版の2つに大きく分かれていた。イタリア解放過程において、ローマ版は思想的路線と信条を特徴とし、ミラノ版に比べて抽象性が高く理論的であった。一方ミラノ版は社会的責務の扇動を特徴としている。執筆者たちに、パルチザン闘争の全期間を通して、党の戦略路線の起草と共産党の印刷物全体の普及が委ねられた。初期から首尾一貫した社会的責務という新聞の政治的路线が特徴づけられている。(SIR:111-117)

『リナッシタ *Rinascita*』は1944年6月に創刊された共産党機関誌で、初代編集長はパルミロ・トリアッティで、党の思想的・文化的手引きとして提供された。1964年のトリアッティ亡きあとは様々な指導者が編集に関わった。1989年8月から1990年1月に休刊となり、その後リニューアルされ、番号も新しくなって不定期で発行されたが、1991年に最終的に完全に廃刊となった。この廃刊の流れは1991年のソビエト社会主義共和国連邦解体、イタリア共産党の解散および左翼民主党 *Partito Democratico della Sinistra* 結成とも相俟っている²²⁾。

次にシャーシャの共産党紙への寄稿記事をいくつか見ていく。1つ目は1962年に『リナッシタ』に寄せた「シチリア人とマフィア *I siciliani e la mafia*」である。聖金曜日にカルタニセッタで行われる『受難劇 *Martorio*』について書いている。キリストの敵役には街の名士が選出されて演じる伝統になっていた。名士を敵役に据えることで民衆が普段のうっ憤を晴らしていたのだ。そしてシャーシャは最近の情勢について、この名士という支配階級とマフィアの間を解く。

『受難劇』は、マフィアに最も本能的な類似性を見出した。間違いなく存在する事象で、いまやシチリアの社会的・経済的生活の中で活動しているのだ。名士たちにとってそうでないというならば、どれだけのカテゴリーでどれほどの価値で使いつくされたか。名士たちはシチリアで行われた最近の選挙まで信じていた(少ない数ではない)。マフィアのボスを連れて村の広場に姿を見せることが得票につながり、さもなければ票は少なくなると。事実上起こっていたように、彼らの投票は、現実や歴史への無知、国会や州議会で代表を務めることに自惚れるシチリア人の心理状態への無知を相対的に表している。こうした意味において、文化的にシチリアの民衆は、『受難劇』を演じマフィアのボスの庇護を誇示する支配階級の一部に対して、後進的ではないのだ。

「シチリア人とマフィア」1962年5月5日『リナッシタ』58号、p32
 E *Martorio* trovava la più spontanea analogia nella mafia: fenomeno indubbiamente presente e attivo nella vita sociale ed economica siciliana ma ormai, se non per i notabili, esaurito in quanto categoria, in quanto valore. Il fatto che alcuni notabili (non pochi) abbiano creduto, fino alle più recenti elezioni tenutesi in Sicilia, che l'esibirsi nelle piazze dei paesi in compagnia dei capi mafia facesse crescere invece che diminuire, come di fatto accadeva, i loro voti, dimostra la loro ignoranza relativamente alle realtà, alla storia, alla psicologia di quei siciliani che presumono di rappresentare nel Parlamento e nell'Assemblea Regionale.

In questo senso, culturalmente, il popolo siciliano è meno arretrato di quella parte della sua classe dirigente che recita il *Martorio* ed esibisce la protezione dei capi mafia.

I siciliani e la mafia, *Rinascita*, Roma, XVIII, 1, 5 maggio 1962, p.32.

この記事に見られるのは、シチリアの伝統劇について、そしてファシズム政権崩壊後の南部イタリアの辿った歴史とマフィアの関係についての言及である²³⁾。『真昼のふくろう』が成功した翌年の記事であり、世間に求められていたマフィアについての批判的見解を表明した。民衆が文化的に『受難劇』を演じている点が強調されており、「支配者階級－被支配階級」の構図を示し、被支配者階級の支配階級への対抗手段としての『受難劇』を記している。また「支配階級」である名士が、マフィアを助長させているとも告発している。

2つ目に取り上げるのが、1963年の選挙の際に共産党への投票を公言したインタビュー記事である。共産党に近い存在としての意識が見える。

シャーシャ …こうしたことからイタリア共産党に投票すると言えますよ。

－あなたの選択に読者は驚くのではないのでしょうか？

シャーシャ いいえ、そうは思いません。それどころか『レガルペトラ教区』の頃から読者はいつも分かっていたと思います。私が今も昔も共産主義の活動家ではないが、数年前から対談ではいつも共産党と非常に近いところにいるのは確かだと。時折批判的でしたが私にとっては常に有益で好意的なものでした。私のささやかな本がシチリアの現実についてのより重要な社会的責務なのだという確証が、『真昼のふくろう』を書いたときに確かな感覚としてやってきたのです。シチリアの社会的・政治的解放運動への、ちょっとした貢献だったのです。

文化人と1963年の選挙

シャーシャ－ PCI (イタリア共産党) と南部イタリアを解放
1963年4月25日木曜、『ウニタ』、p.3

R. – (...) Anche per questo dunque voterò comunista.

D. – La tua scelta politica potrà in qualche modo sorprendere i tuoi lettori?

R. – Credo di no; anzi ritengo che i lettori abbiano sempre ritenuto, sin dalle *Parrocchie*, che se pure non ero e non sono un militante comunista, sono certo da anni molto vicino al Partito Comunista con un colloquio talvolta critico ma sempre utile e positivo per me. E in un certo senso la riprova di questo è venuta quando ho scritto *Il giorno della civetta* che credo sia il mio libro di maggior impegno rispetto alla realtà siciliana di oggi. È stato un po' il mio piccolo contributo alla lotta per l'emancipazione sociale e politica dei siciliani.

L'Unità, 25 aprile 1963, p.3

Gli uomini di cultura e le elezioni del 1963

Sciascia: con il PCI per il riscatto del Mezzogiorno

インタヴューが驚いているのは－冒頭で述べているのだが－シャーシャが明確な政治的立場を取ることを避けたがっているという認識を持つてのことであった。自身の立場の表明と、シチリアが

抱える問題、社会的責務の意識がこのインタビューからうかがえる。

3つ目に取り上げるのは、1967年『リナッシタ *Rinascita*』に寄せた「社会的責務と社会的無関心のあいだで *Tra impegno e disimpegno*」(1967年11月24日『リナッシタ』p.25)という記事である。この記事は「私は社会的責務の時代には書き始め、社会的無関心の時代には書き続けている *Ho cominciato a scrivere in tempi di impegno; continuo a scrivere in tempi di disimpegno*」という書き出しで始まる。はっきりと書いていないが、ファシズム打倒とイタリア解放過程で若い知識人たちが持っていた意識のことを指しているのだろう。そして、この若者たちの意識は共産党の活動に深く結びついたものであった。この文章の中でシャーシャは「自身は他者に伝えるために本を書いている、ではこの他者とは誰なのか?」と問う。「読者-消費者」ではなく、「読者-対話者」とし、共通意識に基づいた友情にとっても似た関係であると述べている。また広範な読者を獲得することで、満足し安心すると同時に、一方で満足も安心もしていないと記している。読者が増えることは対話者が増えることではないとする一方で、「読者-消費者、つまり見えない読者」を失うことはどうなのだろう、と書き手と読者の関係に触れている。自身の体験から起こった社会変化と大衆の意識変化を、自身の体験による「著者」と「読者」の問題に引き寄せて見ている。

そのほか全般的に言えるのは、「共産党の媒体」ということを非常に意識して書いているということである。ソ連の作家フセヴォロド・コーチェトフ *Vsevolod Kochetov*²⁴⁾ のイタリア旅行や、ジョージ・オーウェル *George Orwell* の『1984』(1949年/イタリア訳初出は1950年)について、亡くなったマリオ・アリカータ *Mario Alicata*²⁵⁾ へのオマージュなど、読み手を意識していることが寄稿された記事から分かる。

3. 全国紙での仕事

3.1. 飛躍的に広がる作家活動²⁶⁾

シャーシャは『オーラ *L'Ora*』や『ユニタ *L'Unità*』『リナッシタ *Rinascita*』といった特徴のある媒体に加えて、より一般的に普及した媒体にも本格的に関わり始める。

1969年からイタリアで最も読まれている全国紙『コッリエーレ・デッラ・セーラ *Corriere della sera*』、1970年からスイス・イタリア語圏の『コッリエーレ・デル・ティチーノ *Corriere del Ticino*』、1972年から全国紙『ラ・スタンプ *La Stampa*』、その他に、地方紙の『シチリア日報 *Gionarle di Sicilia*』や『南部イタリア新聞 *La Gazzetta del Mezzogiorno*』、ジェノヴァの新聞『19世紀 *Il Secolo XIX*』、全国紙『レプブリカ *La Repubblica*』、週刊誌『エスプレッソ *L'Espresso*』『エポカ *Epoca*』などへの執筆も多数行っている。(Traina 1999: 124-127)

こうして活動の場を全国へと広げて著名な作家になっていった。新聞ではコラム欄 *rubrica* も担当した。『オーラ *L'Ora*』での“雑記帳 *Quaderno*”“余談と一致 *Incidenze & coincidenze*”や、『コッリエーレ・デッラ・セーラ』における“黒を重ねる *Nero su nero*”“辞典 *Dizionario*”、『ラ・スタンプ』の“雑記帳 *Taccuino*”もしくは“シャーシャの雑記帳 *Taccuino di Sciascia*”、『コッリエーレ・デル・ティチーノ』の“手動印刷機 *Il torcoliere*”、『エスプレッソ』の“事典 *L'enciclopedia*”がある。(Traina 1999: 124-125)

1969年2月ジョヴァンニ・スパドリニ *Giovanni Spadolini* に誘われて『コッリエーレ・デッ

ラ・セーラ』に書き始めた。そしてスパドリニが1972年に編集長を降りるとともに、『ラ・スタンパ』に書き始める。1970年代はシャーシャにとって政治と結びついた作品が多かった。作品もまた『権力の朝 *Il contesto*』(1971年)、『トード・モード *Todo modo*』(1974年)、『マヨラナの失踪 *La scomparsa di Majorana*』(1975年)、『モーロ事件 *L'affaire Moro*』(1978年)など政治的・社会的にも物議をかもした作品が並ぶ。(OAⅡ:XXXⅦ-XXXⅢ)

そしてまたシャーシャ自らが政治に関わっていく。1975年パレルモ市議会議員の候補リストに挙げられる。1978年アルド・モーロの誘拐・殺害事件が起こると、1979年急進党から立候補し1983年まで下院議員を務め「モーロ事件真相究明委員会」の一員になる。政治活動に加えて加速度的に執筆の場と社会的活動範囲が広がっていった時期である。より近接した距離で政治を描いており、作品に伴って論争も多くなったことは注目の現れでもあり、知名度・影響力を示している。

新聞のコラム欄に残した執筆活動をまとめたものが、1979年エイナウディ社より出版された『黒を重ねる *Nero su nero*』を始めとする評論・エッセイ集である。『黒を重ねる』は大部分が1969年からの『コッリエーレ・デッラ・セーラ』『スタンパ』『オーラ』に載せた記事で構成されている。構成記事は1969～1972年『コッリエーレ・デッラ・セーラ』掲載分、1972～1977年『ラ・スタンパ』掲載分、1978年『オーラ』掲載分である。1979年5月原稿入稿し、1979年9月に出版されている。(OAⅡ:1389-1418)

『黒を重ねる』について、シャーシャは次のように言及している。

私にとって大変意味のある本だ。人生10年間という意味で。ユーモア、不機嫌、選択、憂鬱、論争といったものを映し出す。そして1969年以降に書いた本全てを観念的には内包する本である。Un libro che per me significa molto: dieci anni di vita, uno specchio di umori, di malumori, di scelte, di malinconia, di polemiche. Un libro che può anche contenere, e idealmente contiene, tutti i libri che ho scritto dal'69 in poi... (OAⅡ:1391)

『黒を重ねる』にはモデルがあり、それはジュール・ルナールの『ジャーナル *Journal*』であったが、最終的にはエリオ・ヴィットリーニの『公開日記 *Diario in pubblico*²⁷⁾』に近くなったと述べている。多忙を極めた中で残した1970年代の記録である。『黒を重ねる』つまり<黒の上に黒 *Nero su nero*>は「現実の黒いページに書かれる黒い文字」を意味する。イタリア語には「(契約書などに)明記する *metter nero su bianco*」という成句がある。「白に黒を重ねる *Nero su bianco*」としたが、より悲観的に表現したかったので「黒を重ねる」になり風刺的な意図があったと、1979年9月12日掲載の『シチリア日報』のインタビューで答えている。(AOⅡ:1390)。

『黒を重ねる』で取り上げられているテーマは様々である。トライナが指摘するように、新聞のコラム欄ではジャーナリスティックなテーマや論調は抑えられており、文学や演劇などについて述べている(Traina2009:124-125)。しかし小説のテーマや社会活動においては「政治への接近」が特徴として挙げられる。

3.2. 劇場の幕としての新聞

シャーシャにとってジャーナリズムとは何だったのか。読者でもあり書き手でもあった。さらには新聞の書き手であると同時に、作品に新聞を滑り込ませ、その新聞の思想や社会的状況までも描

いてきた作家であった。

シャーシャは新聞を〈幕 sipario〉に例えている。

新聞を読むと暗い気持ちになる。まさに新聞やジャーナリズムについて暗い気持ちになるのだ。新聞は幕のように私の前に現れる。より正確にいうと、背後で動くものや、そこにある物体、準備される場面といったものをいくらか予見させる緞帳のようだ。慣れた目や、鍛えられた目を必要とする。鋭さということではない。それだけでは十分ではないのだから。経験すること。皆が持っている経験によるのだ。

そして新聞は恐ろしく均一である。いくらかの違いを、事実についての書かれたもののなかに掴めるだろう。しかし事実の判断についての違いはまれである。もちろん最も流布している新聞について言っている。小さい新聞やそれほど流布していない新聞では、新聞によって事実への評価は変わる。我々は小さい新聞やあまり普及していない新聞を読むことを習慣化し、印刷部数の多い新聞をおろそかにすべきなのだろうか？

不確定な恐れが新聞を苦しめているようだ。方針を持つと言う恐れや、正確な判断で事件を取り上げると言う恐れ。誰か・何かの得になる動きをすることへの恐れ、危険な審議にかけることの恐れ、確実なものを掴むという恐れ、望む安全がわずかばかりの危険な場所に身を置くことを恐れるかのようなのだ。実際、最大の危険がまさにここにある。つまり危険への恐れをもつこと自体が危険なのだ。

La lettura dei giornali mi dà neri pensieri. Neri pensieri sui giornali appunto, sul giornalismo. I giornali mi si parano davanti come un sipario. Più esattamente come un velario, poiché qualcosa di quel che si muove dietro, degli oggetti che ci stanno, della scena che si prepara, la lasciano intravedere. Solo che ci vuole un occhio abituato, un occhio allenato. Non acuto, ché non basta. Esperiente. Di un'esperienza che tutti hanno.

C'è poi, impressionante, l'uniformità. Qualche differenza nel riferire i fatti si può cogliere. Ma raramente nel giudizio sui fatti. Parlo, naturalmente, dei giornali più diffusi. Tra i piccoli e meno diffusi, la valutazione dei fatti muta da giornale a giornale. Dovremmo abituarci a leggere i piccoli meno diffusi e a trascurare quelli dalle alte tirature?

Una indefinita paura sembra attanagliare i giornali. La paura di avere una linea, di assumere i fatti in un giudizio preciso. È come la paura di fare il giuoco di qualcuno o di qualcosa, di mettere in discussione quel che è pericoloso discutere, in pericolo quel po' di sicurezza cui ci si vuole aggrappare. E in realtà il maggior pericolo sta appunto in questo: nell'aver paura di un pericolo).

1978年7月13日『オーラ』、p1

『黒を重ねる』所収 (OAⅡ:1094)

この文章は『黒を重ねる』に収録されたが、元は『オーラ』に掲載された記事である。新聞によって生じる論調の違いや、取り上げるテーマの違い、それはシャーシャ自身が書き手としての経験したものであろう。小さい新聞やあまり流布していない新聞とは、『オーラ』『ウニタ』『リナッシタ』のような媒体であり、大きな新聞とは『コッリエーレ・デッラ・セーラ』『ラ・スタンパ』『シチリ

ア日報』などである。発表媒体が大きくなるほど、均一的で論調が抑えられていくことを指摘している。有名な新聞が伴う一種の制約は、チャーシャの作家活動にも言える。

さらに興味深いのは、ジュゼッペ・アントニオ・ボルジェーゼ Giuseppe Antonio Borgese (1882-1952年) についての『若き作家の肖像のために *Per un ritratto dello scrittore da giovane*』(1985年) という評伝である。ボルジェーゼの叔父が保存していた若きアントニオの手紙を元に構成させている。パレルモにほど近いポリッツィ Polizzi で過ごした幼少期から、パレルモ大学での生活やその後の執筆活動を文学やジャーナリズムとの関わりから追っている。ボルジェーゼの手紙から、チャーシャが12歳の頃に初めて見た1932年のパレルモと、ボルジェーゼが12歳の頃に見た1884年のパレルモを比較し、当時の生き方、習慣、行動を教えてくれるものとして興味深く読み、その差が最小限であることを記している。ボルジェーゼは19世紀初頭に『オーラ』でも執筆していた。『オーラ』が創刊して間もない頃なのである。この評伝のなかでチャーシャは、ボルジェーゼが“文人ジャーナリスト *giornalista letterario*”になりたかったのだ、と説く。そしてボルジェーゼが“文芸ジャーナリズム *giornalismo letterario*”を作りたいと思っていたのだ、と記す。敬愛するヴィタリアーノ・ブランカーティ Vitaliano Brancati とも親交のあった、この著名なジャーナリスト、文芸批評家、作家でもあったボルジェーゼは、ジャーナリズムの隆盛期を支えた人物である。チャーシャの中にはいつも南部イタリアの知識人への意識がある。それは彼らへのオマージュでもあり自ら受け継ぐ血でもある。

結論

チャーシャにとって新聞は「批判的読者＝観察者」と「書き手」の二重の意味合いを持つ。読み手として新聞を劇場の〈幕 *sipario*〉に例え、その背後で動くめくものや、準備される場面を予見する目が必要だと述べた。これは「作家は真実を直観的に見抜くものだ」と言ったチャーシャの言葉にもつながる。全国的に有名になっていくなかで書き手としての制約を受けながらも、時には読者と対話し、見えない読者にも発信し続けた。

チャーシャの文学の傍らには、いつも共産党に対する親近感とジャーナリズムとの関わりがあった。第1にカルタニセッタでの反ファシストの知識人たちとの出会いである。反ファシストの意識は南部イタリア解放過程のなかで共産党の果たした役割とも結びついている。第2に1955年からの『オーラ』への執筆である。それまで『ガッレリア *Galleria*』などの文芸誌に書いていたチャーシャの世界を広げるきっかけとなった。社主が共産系出版社となり、敏腕編集長ニスティコによる改革時期とも重なり、チャーシャに文学の世界だけにとどまらない様々なものをもたらした。マフィアを取り上げた新聞でもあり、またレナート・カンディダの『このマフィア』の出版があり、『真昼のふくろう』が生まれる土壌があったといえる。チャーシャは数多くの新聞や雑誌に執筆したが、有名になってからも長く関係を持ち続けたシチリアの新聞『オーラ』の存在は、自らの作家としてのスタンスを保ち続ける場所でもあったのだろう。トライナも触れているが名だたる文芸誌への寄稿から始まり、やがて文芸誌の編集者となり新聞へ進出していった。1955年小さな新聞から始まった執筆は、1960年代には共産党紙への執筆があり、そして全国紙でコラム欄を担当するまでになった。

共産党紙での執筆は、カルタニセッタ時代からの続く共産党とのつながりを強く意識させる。執

筆したのを見ると「社会的責務 *impegno*」という単語がキーワードとして浮かび上がる。これは共産党内部で良く見られる言葉で、“共産党”というものを十分意識して書いていたのだろう。共産党に近い存在であることを自覚し公言しているが、その共産主義にも批判の目を向けることを忘れない。「スターリンの死」「撤去」では、保守-カトリック、ラディカル-共産主義の構図が描かれると同時に、スターリンを崇拜する共産主義者を作品中でカリカチュア的に描く。イタリア解放前後の混乱期に国家立て直しに尽力を尽くした共産党への共感と、フルシチョフ報告による衝撃と混乱があった。1960年代の政党への関わりは、1970年代の一連の作品や議員活動へ契機となっている。

地方紙、政党紙、全国紙での執筆は、段階を追って、それまで文学の世界にいたシャーシャの活動領域を加速度的に広げた。もはや無名の作家ではなく、読者が期待する作家として役割を担い、大きな新聞が持つ制約に縛られながらも読者に発信し続けた。また全国紙で発信する存在になっていったにも関わらず、“地方の立場”ということを意識的に見せている。それは「南部イタリアの知識人」というスタンスである。シャーシャが「南部イタリア *meridionale*」という言葉を使うとき、それはグラムシの「南部問題」にも通じる意識である。

新聞の文化欄は作家シャーシャの試行空間であり、時代の記録であり、作家としての可能性と文学の試みを持って社会を文学で描きだす場所であった。「私にとって文学とは真実を描くことだ。真の文学とは真実を含んでいるかどうかで判断される」と言ったシャーシャの作風が現実の再構成に近い記録的文学、報告文学的となっていたのは自然な流れであった。

注

- 1) 『朝日ジャーナル』掲載インタビュー（1982年7月16日号）。対談／訳は竹山博英。
- 2) 邦訳がある場合は邦題を記す。
- 3) Traina, Giuseppe 1999, *Leonardo Sciascia*, Mondadori, pp.124-127.
- 4) 2004年11月29-30日にパレルモとラカムーテで開催されたマリオ・フランチェーゼ記念報道賞の折に、シチリア記者協会 *Ordine dei giornalisti di Sicilia* によって奨励された大会をまとめた書籍である。
- 5) Traina, Giuseppe 2009, *Una problematica modernità. Verità pubblica e scrittura a nascondere in Leonardo Sciascia*, Bonanno Editore, pp.61-85.
- 6) AA.VV., 2011, *Troppo poco pazzi: Leonardo Sciascia nella libera e laica Svizzera*, a cura di Renato Martinoni, Leo S. Olschki editore, pp.27-42. スイスのイタリア語圏ティチーノ州における新聞とシャーシャとの関わりを研究。
- 7) この著書では『オーラ *L'Ora*』とシャーシャの関わりを中心に、『新世界 *Mondo Nuovo*』『南部イタリアの展望 *Prospettive meridionali*』『シチリア事情 *Cose di Sicilia*』などでの執筆を追っている。
- 8) 巻末につけた文献目録は、アントニオ・モッタの文献目録（2009年）を補完し発展させている。
- 9) 1978年3月16日与党のキリスト教民主党中央首アルド・モーロが「赤い旅団」とみられる一派に誘拐され、55日後の5月9日殺害された姿で発見された（千種訳 1979：1）。事件に関連して、シャーシャの見解が1978年5月4日、5月5日に『オーラ』に掲載された。（OAI: 1398）
- 10) «[...] sto lavorando a un racconto lungo sulla mafia di tecnica gialla che avrà il titolo shakespeariano de “Il giorno della civetta” (“come la civetta quando il giorno compare”) » (Squillaciotti 2008: 62)
- 11) «Avevo intrapreso a scrivere un racconto di tecnica “gialla”-ambiente siciliano, mafia e politica» (Squillaciotti 2008: 62)
- 12) シャーシャの歴史観は、アントニオ・グラムシ *Antonio Gramsci* の「南部問題」とも共通するところがある。
- 13) 船主であり実業家でもあったフローリオ家は、19世紀初頭から薬草店、ぶどう酒醸造、まぐろ加工、海運業などで財をなしたが、急激な没落によって1913年に『オーラ』を手放すこととなった。フローリオ

- 家は郵便船事業のほかに、1880年代より移民が増え始めたアメリカなどの国際航路にも着手している。(竹山 1994: 88-105)
- 14) <http://mw.bibliotecacentraleregionesiciliana.it/index.php?it/334/archivio-lora> 参照。
- 15) «I giornalisti e i giornali, dunque, sono di norma al servizio delle opposte verità che ai lettori vengono svelate o nascoste». (Traina 2009: 69)
- 16) 1935年シャーシャは家族でカルタニセッタに移り住み、師範学校に通った。(OAI: XXXIV)
- 17) エマヌエーレ・マカルーソ (1924-) は1941年に非合法的にイタリア共産党 (PCI) に入党した。1951年までシチリアにてイタリア労働総同盟 (CGIL) の書記を務め、ベルリングエルとともに1960年に本部に入り共産党事務局にいた。1963年から1992年までに下院議員、上院議員を務める。1982年から1986年まで『ウニタ』の編集長であった (Macaluso 2010: 裏表紙紹介文より)。
- 18) G. ナポリターノの共産党接近は1944年-1945年で、ファシズム末期において、大学に入り非合法下の共産党員をすでに「発見」していたという。この時期に大衆党としての共産党の基礎が築かれた。北部では抵抗運動や解放戦のなかで生じたのに対し、南部では、もっとも一貫した方法でファシズムとたたかった勢力であり、入党動機はファシズムが残した南部問題などを解決することであった。北部でも南部でも、小ブルジョアあるいは知的中間層の若者たちが共産党に参加していた。(ナポリターノ／ボブズボーム 山崎訳 1976: 4-5, 15)
- 19) 「スターリンの死」は『現在 *Tempo Presente*』II、1957年1月1日、pp.26-40に発表された。(OAI: 1723)
- 20) 『葡萄酒色の海 *Il mare colore del vino*』に収録されている。この作品は『イル・ジョルノ *Il Giorno*』(1962年2月11日)に発表された。(OAI: 1875-1876)
- 21) 1926年10月31日にファシズム政権によって廃止されたが非合法に印刷されていた。1944年6月6日共産党機関紙は再び合法となった。(GI3: 1897-1898)
- 22) http://guida.archivigramsci.it/index.php?option=com_content&view=article&id=90&Itemid=12 参照。
- 23) 第二次世界大戦時、連合軍はマフィアのボスのリストをポケットに携えてシチリアに上陸した。シチリアにおけるファシズム解放の過程にはマフィアの協力が絡んでいる。
- 24) イタリア語表記では *Kocetov* と表記されている。
- 25) マリオ・アリカータ (1918-1966) レッジョ・カラブリア生まれる。ローマ版『ウニタ』に執筆し、1962年にはミラノ・ローマ統一版の編集長に任命された。晩年は、1966年アグリジェントで起こった建物崩壊という大惨事について、安全性を無視した手抜き工事に原因があるとし行政責任を追及した。
La frana di Agrigento e l'appello all virtù, in «Rinascita», Roma, XXIII, 47, 1 dicembre 1967, pp.26-27 および http://guida.archivigramsci.it/index.php?option=com_content&view=article&id=3&Itemid=792 参照。
- 26) この項は特に Traina 2009 を参照。
- 27) 一方で、ブランカーティの『ローマの日記 *Diario romano*』の重要性と日記形式の影響を述べる論文もある。(OA II: 1390)

文献一覧

【略号】

- GI1 *Giornalismo italiano 1860-1901*, a cura con un saggio introduttivo di Franco Controbia, Milano, Mondadori, 2007.
- GI2 *Giornalismo italiano 1901-1939*, a cura con un saggio introduttivo di Franco Controbia, Milano, Mondadori, 2007.
- GI3 *Giornalismo italiano 1939-1968*, a cura con un saggio introduttivo di Franco Controbia, Milano, Mondadori, 2009.
- GI4 *Giornalismo italiano 1968-2001*, a cura con un saggio introduttivo di Franco Controbia, Milano, Mondadori, 2009.
- SIN *La stampa italiana del neocapitalismo*, a cura di Valerio Castronovo e Nicola Tranfaglia, Laterza,

1976.

SIR *La stampa italiana della resistenza agli anni sessanta*, a cura di Valerio Castronovo e Nicola Tranfaglia, Laterza, 1980.

VB I Vitaliano Brancati, *Opere* (Romanzi e saggio), 3ed, a cura di Marco Dondero, Mondadori 2003.

VB II Vitaliano Brancati, *Opera* (racconti, teatro, scritti giornalistici), a cura di Marco Dondero, Mondadori 2003.

【テキスト】

OB I Leonardo Sciascia, *Opera* (1956-1971), 7ed, a cura di Claude Ambroise.vol. I . Milano, Bompiani, 2004.

OB II Leonardo Sciascia, *Opera* (1971-1983), 6ed, cura di Claude Ambroise.vol. II . Milano, Bompiani, 2004.

OB III Leonardo Sciascia, *Opera* (1984-1989), 6ed, a cura di Claude Ambroise. vol. III . Milano, Bompiani, 2004.

OA I Leonardo Sciascia, *Opera* (Narrativa-Teatro-Poesia), a cura di Paolo Squillacioti, vol. I, Milano, Adelphi edizione, 2012.

OA II Leonardo Sciascia, *Opera* (Inquisizioni-Memorie-Saggio), a cura di Paolo Squillacioti, vol. II, Milano, Adelphi edizione, 2014.

Qua Leonardo Sciascia, *Quaderno*, Palermo, Nuova Editrice Meridionale, 1991.

【邦訳テキスト】

1976 『権力の朝』、千種堅訳、新潮社。

1979 『モロ事件』、千種堅訳、新潮社。

1987 『真昼のふくろう』、竹山英博訳、朝日新聞社。

1994 『ちいさなマフィアの話』、武谷なおみ訳、白水社。

2011 『短篇で読むシチリア』、武谷なおみ編訳、みすず書房。

【新聞】

L'Unità

Come sei cambiato Winston Smith, in 1984, in «L'Unità», Roma, 18 dicembre 1983.

Sciascia: con il PCI per il sud, a cura di Giorgio Frasca Polara, in «L'Unità», edizione di Milano, 25 aprile 1963, p.3.

Il cammello dell'Italia per la crusca della Sicilia, a cura di Giorgio Frasca Polara, in «L'Unità», Roma, 27 settembre 1964, p.12.

Sciascia: «Perché ho lasciato il consiglio comunale», a cura di Ugo Baduel in «L'Unità», Roma, 20 febbraio 1977, p.8.

Rinascita

I siciliani e la mafia, in «Rinascita», Roma, XVIII, 1, 5 maggio 1962, p.32.

Fratelli senza mafia, in «Rinascita», Roma, XVIII, 11, 14 luglio 1962, p.32.

Tra impegno e disimpegno. Intervento sul tema «Per chi si scrive un romanzo? Per chi si scrive una poesia?», in «Rinascita», Roma, XXIII, 46, 24 novembre 1967, p.25.

La frana di Agrigento e l'appello alla virtù, in «Rinascita», Roma, XXIII, 47, 1 dicembre 1967, pp.26-27.

Viaggio in Italia di Kocetov, Lettere di Vittorio Strada e Leonardo Sciascia a «Rinascita», in «Rinascita», Roma, XXIV, 17 marzo 1967, p.27.

【引用参考文献】

AA.VV.

1998 *La memoria di carta: Bibliografia delle opere di Leonardo Sciascia*, a cura di Valentina Fascia con scritti di Francesco Izzo e Andrea Maori, Milano, Edizioni Otto/Novecento.

1997 *Storia del giornalismo italiano: Dalle origine ai giorni nostri*, Giuseppe Frinelli[et al.] , UTET Libreria.

2006 *Sciascia, il romanzo quotidiano*, 2.ed., a cura di Egle Palazzolo, Palermo, Kalós.

2007 *L'enciclopedia di Leonardo Sciascia: caos, ordine e caso*, a cura di Pietro Milone, Milano, La Vita Felice.

2011 *Troppo poco pazzi: Leonardo Sciascia nella libera e laica Svizzera*, a cura di Renato Martinoni, Firenze, Leo S. Olschki editore.

Ambroise, Claude.

1974 *Invito alla lettura di Leonardo Sciascia*, Milano, Mursia.

Ajello, Nello

1986 *Lezioni di giornalismo : com'è cambiata in 30 anni la stampa italiana*, 2ed. Garzanti.

Castagnino, Angelo

2014 *The intellectual as a detective: From Leonardo Sciascia to Roberto Saviano*, New York, Peter lang.

Collura, Matteo.

2007 *Il maestro di Regalpetra vita di Leonardo Sciascia* , Milano, Longanesi.

Macaluso, Emanuele.

2010 *Leonardo Sciascia e comunisti*, Milano, Feltrinelli.

Motta, Antonio.

2009 *Bibliografia degli scritti di Leonardo Sciascia*, Palermo, Sellerio Editore.

Onofri, Massimo.

2004 *Storia di Sciascia*, Roma, Laterza.

Squillacioti, Paolo.

2008 *L'alba del giorno della civetta: Il silenzio di Sciascia*, «Per leggere», n14-primavera, pp.59-78

Tani, Stefano.

1984 *The doomed detective: The Contribution of the Detective Novel to Postmodern American and Italian Fiction*, Carbondale (in USA), Southern Illinois University Press.

1990 『やぶれさる探偵 探偵小説のポストモダン』、高山宏訳、東京図書。

Traina, Giuseppe.

1999 *Leonardo Sciascia*, Milano, B. Mondadori.

2009 *Una problematica modernità. Verità pubblica e scrittura a nascondere in Leonardo Sciascia*,
Bonanno Editore.

【日本語文献】

越前貴美子

2012 「シチリアの片隅から世界へー編集者レオナルド・シャーシャ」『和田忠彦先生還暦記念論文集』土肥
秀行・橋本勝雄・住岳夫 編、双文社印刷。

鈴木真由美

2010 「パヴリーニと現代イタリア語の問題：「新しい言語問題」（『異端経験論』）を中心に」『言語・地域文
化研究』（16）、東京外国語大学大学院、1-13.

竹山博英

1982 対談・竹山博英訳・聞き手「テロ・マフィア・失業……それでもわが国は倒れない —現代イタリア
作家（L・シャーシャ氏）が語る社会の自画像—」『朝日ジャーナル』7月16日号、vol.24、No.30、朝
日新聞社。

1985 『シチリア 神々とマフィアの島』、朝日新聞社。

1991 『マフィア・その神話と現実』、講談社。

1994 『シチリアの春—世紀末の文化と社会—』、朝日新聞社。

1995 『マフィア シチリアの名誉ある社会』、第7版、朝日新聞社。

橋本勝雄

2003 「文学と真実 レオナルド・シャーシャ『モーロ事件』」『言語文化』（20）、明治学院大学言語文化研究
所、pp.72-88。

アントニオ・グラムシ

2011 『グラムシ『獄中ノート』著作集Ⅶ 歴史の周辺にて「サバルタンノート」注解』松田博訳、明石書店。

2013 『グラムシ『獄中ノート』著作集Ⅲ 知識人とヘゲモニー「知識人論ノート」注解』松田博訳、明石書店。

G. ナポリターノ／E.J. ホブズボーム

1976 『イタリア共産党との対話』山崎功訳、岩波新書。

【Web ページ】

新聞社デジタル・アーカイブ

L'Unità : <http://archivio.unita.it/>

Corriere della sera: <http://archivio.corriere.it/Archivio/interface/landing.html>

La stampa: <http://www.lastampa.it/archivio-storico/>

シチリア州立図書館サイト

L'Ora および Vittorio Nistico について (2016.4.17. 取得)

<http://mw.bibliotecacentraleregionesiciliana.it/index.php?it/334/archivio-lora>

Fondazione Istituto Gramsci onlus サイト

Rinascita について (2016.4.8. 取得)

http://guida.archivigramsci.it/index.php?option=com_content&view=article&id=90&Itemid=12

Mario Alicata について (2016.4.8. 取得)

http://guida.archivigramsci.it/index.php?option=com_content&view=article&id=3&Itemid=792

(本学大学院博士後期課程)